

平成 22 年度 グローバル COE プログラム
「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」
次世代イニシアティブ研究助成報告書

1. 課題名、調査地、氏名

課題名：グローバル化時代における先端科学用語のアラビア語化

調査地：エジプト、シリア、レバノン

氏名：竹田 敏之（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 研究員）

2. 研究の目的

本研究は、現代アラブ世界における情報科学・技術、医療分野の教育制度を把握し、とくにこれらの分野の学術用語の生成と標準化について、アラビア語化（タアリーブ）のメカニズムの解明を中心に明らかにすることを目的としている。

また本研究は、イニシアティブ1のサブ・グループ「中東・イスラーム地域における環境・技術・制度の長期ダイナミクス」（小杉班）の活動と連動し、エジプトやシリアなどのアラブ諸国で現代的な先端科学をどのように自文化に吸収しながら現代にふさわしい発展径路を模索しているかを研究する一環として、学術用語の生成と標準化を調査・研究するものである。

アラビア語はアラブ世界 22 カ国の国語であると同時に同地域の共通語でもある。この地域では教育や医療の分野を中心に人的交流や移動がトランスナショナルな形で行われるため、国ごとに異なる学術用語の偏差は、常に議論の対象となってきた。インターネットが急速に普及したこの情報化・グローバル化時代において、教育の言語のアラビア語化や先端科学用語の標準化はいよいよ早急に解決すべき課題となっている。

報告者は 2007 年度に本プログラム大学院教育部会の助成により「現代アラブ世界の形成とアラビア語ネットワークの実態調査」の臨地研究を行う機会を得て、エジプトとチュニジアを中心にアラビア語による学術用語の整備の実態を明らかにした。そしてその成果の一部を、拙稿「現代アラブ世界の展開と学術用語の整備—タアリーブ（アラビア語化）による外来語受容とナハトによる造語法を中心による造語法を中心に」にまとめ、本プログラムのワーキングペーパーとして発表した。

本研究はこれらをさらに発展させ、先端科学のアラビア語化について、現在進行しつつある動向を把握しようとするものである。

3. 研究の内容と成果の概要

本研究では、上記の目的を達成するために、主として以下の3点を主眼に置いた臨地調査を、2011年1月27日から3月7日の期間、エジプト、シリア、レバノンを調査地として実施した。

- (1) アラブ諸国における自然・応用科学分野の教育制度の変遷とその現況、とくに情報科学・技術、医学・医療分野における大学教育の実態の把握。
- (2) 上記の分野における教育言語の問題と学術用語の現状、とくに地域偏差と標準化という視点から現

代の学術語としてのアラビア語の機能とその実態の解明。

- (3) 上記(1)教育制度、および(2)学術用語の整備と発展において大きな役割を果たしてきた、シリア・アラブ学術アカデミーを中心としたアラビア語化を推進する学術機関の活動とそのネットワークに関する調査・研究の深化。

臨地調査の内容と成果は次のとおりである。

<エジプト>

第一の調査地であるエジプトでは、カイロ・アラビア語アカデミー(1932年設立)を訪問し、編集委員のムスタファー・ユースフ氏による協力を得ながら、学術用語の整備におけるアカデミーの活動と専門用語辞典の編纂に関する調査および資料収集を行った。また、アカデミー付属の図書館にて、アカデミーの刊行物(特に専門用語を扱う辞書類)の現況を調査するとともに、エジプトにおける専門用語辞典の草分け的存在であるアフマド・イーサー(1886-1946)著『植物学用語辞典』(1930)と、ムハンマド・シャラフ(1890-1949)著『医学用語辞典』(1929)を主たる対象に、「ナハト(混成語)」に関連した語彙データの抽出作業を行った。

エジプトは、他のアラブ地域と比較して最も早い時期である1827年に、近代的な教育制度に基づく(イスラームの伝統とは別枠の、いわゆる西欧近代の教育制度・様式を導入した形での)医学教育を、アラビア語を教育言語として開始している。その拠点となったのが、ムハンマド・アリーの近代化政策の一環としてアブー・ザバル地区の軍人病院に設置された医学校であり、現在のエジプトにおける医学・医療研究の中心であるカスル・アイニー病院および同医学部(1925年にカイロ大学の一学部として改組、現在に至る。)はこれを前身としている。今回の調査では、このカスル・アイニー医学部を中心にアラビア語による医学書・教科書関連の出版状況を調べるとともに、教育制度の変遷と医学および理系分野一般に関わる教育言語の問題に関する調査・文献収集を行った。

またその調査過程で、近現代エジプトの文化史を専門とするイブラーヒーム・ジャミーイー教授(カイロ大学、文学部歴史学科)を訪問し、同テーマに関する聞き取り調査を実施した。エジプトの教育史やターハー・フサインなど現代アラブ知識人の言語文化・教育思想を扱った多くの著作を持つ同氏と、エジプトにおける文芸復興「ナフダ」の時代を牽引したイスラーム知識人リファア・タフターウィー(1801-1873)について、彼の翻訳活動の事績や学術用語のアラビア語化における役割を中心に、学術的な議論を交わせたことは誠に有意義なことであった。また同氏からは、タフターウィーを創立者とする翻訳学校「アルソン」(1835年開校、1873年にアインシャムス大学の一学部として改組。)の沿革と現況について、大変有益な資料および知見の提供を受けることができた。

<シリア>

シリアでは、2007年の臨地調査の際にも様々な面で協力いただいた、ダマスカス・アラビア語アカデミー(1919年設立)副長のアブドゥッラー・ワースィク教授を訪問し、シリアにおける学術用語の制定プロセスと学校教育(特に高等教育課程)におけるその使用の現状について聞き取り調査を行った。また、アカデミー資料室を利用し、現代タアリーブ研究の礎を築いたことで知られる第3代ダマスカス・

アカデミー長のムスタファー・シハービー（1893-1968）が編纂した『農学用語辞典—アラビア語・フランス語』（1943）を対象に、ナハト語彙の抽出作業を行い、科学用語関連語彙データの集積とその分析を進めた。さらに、ワースィク教授の協力を得ながら、ダマスカス大学の医学部、歯学部、薬学部で使用されている教科書・辞書類の収集および出版リストの作成を進めた。

シリアはアラブ諸国の中でも、医学教育のアラビア語化を強く推進してきたことで知られている。その歴史は長く、オスマン帝国から独立した翌年 1919 年に、ダマスカスに医学学院（1903 年創立のオスマン医学校を前身するが、1919 年までの教育言語はトルコ語によっていた。フランスからの独立を果たした 1946 年、シリア大学の一学部となり、1958 年にダマスカス大学医学部へと改組。）が設置され、それ以降、今日に至るまでアラビア語による医学教育（薬学を含む）を徹底してきた。その過程で、大きく議論の対象となったのが、教育に携わる大学教員、専門家や現場の医師、あるいは病院・医療機関によって各々に異なる医学用語ほか専門用語をいかに統一すべきかという課題であった。この専門用語の不統一の問題については、国内のみならずアラブ諸国全体でも、解決すべき重要課題として現在に至るまでその議論は続いているが、シリア国内に限って言えば、まず、1956 年にシリアの医学界を代表する医師であり学者のフスニー・サッバハ（1968 年から 86 年までダマスカス・アラビア語アカデミーの長を務める）が『多言語医学用語辞典』を刊行したのを大きな契機とし、シリア大学に「シリア大学医学部学術用語制定委員会」が設置された。その 10 年後、1966 年に「アラブ人医師連合」が発足し、主要メンバーによって「医学用語統一委員会」が設けられ、この両者の流れを汲む形で、1983 年にアラビア語—英語—フランス語の 3 言語による『医学用語統一辞典』が刊行されるに至る。この辞書は、20 世紀中葉にイラクで編纂された医学辞書を継承する部分が多くある点でも大変興味深く、また現在は WHO（世界保健機関）による普及版がエジプト、湾岸諸国などアラブ諸国各地で入手可能となっている。本研究で今後、医学用語のアラビア語化に関する関連語彙の集積と解析を行っていく上で、重要な資料と位置付けたい。

さらに今回の調査では、ワースィク教授の紹介により、ダマスカスにある ALECSO（アラブ教育文化学術機構）附属タアリーブセンター（「タアリーブ」とはアラビア語で「アラビア語化」または「アラブ化」を意味する）への訪問が可能となり、同機関が刊行する出版物『タアリーブ』の調査および関連資料・文献の収集を行った。これまで報告者は、アラブ世界の形成と現代アラビア語の成立に重要な機能を果たしてきた ALECSO の活動に注目し、本部のあるチュニジアなどを調査地としながら、同機関の活動に関する調査・研究を進めてきた。今回収集した原典資料を中心に解析を行い「医学・医療」関連の語彙データとしてまとめていくことで、ALECSO に関する研究についても、新たな視座を加えた考察が可能になると考えている。

<レバノン>

レバノンでは、現代思想を専門とし『二大潮流の相克：イスラーム主義と世俗主義』（ビールーニー出版、ペイルート）の著者としても知られるペイルート・アラブ大学のカーミル・ダーヒル教授を訪問し、レバノンにおける先端科学および医療医学の分野における大学教育の実態について聞き取り調査を行った。同氏からは、特にペイルート・アメリカン大学（1866 年にプロテスタント・シリア・インジー

ル〔福音〕学院として創立)における教育制度の展開と、特に海外宣教団による医療施設の建設と医学教育の普及について、関連資料と知見の提供を受けた。

レバノンにおける医学・医療教育とその関連施設は大きく分けて、シリア・インジール学院に1867年に設置された医学・薬学部の流れを汲むものと、1880年にフランスからのジェズイット宣教団によって設立された医学校(1919年に「医学・薬学フランス学院」となる)の流れを汲むものがある。教育言語については、後者は、当初よりフランス語である一方、前者は初期の1887年までアラビア語によっており、その後、英語に変更され現在に至っている。現在はベイルートを中心に、レバノンにおける医学教育および医療機関では、ほぼ英語およびフランス語が使用言語として広く浸透している。また理系分野はもとより、大学教育の多くの科目は外国語で行われており、概して知識層(あるいは大学生であっても)は、アラビア語、英語、フランス語のトリリンガル(三言語併用)で生活をしている者も少なくない。

しかし一方で、近年、知識層を中心に「アラビア語に今一度、立ち返ろう」という動きが高まっている点にも注目する必要がある。その現象は、近年、アラビア語による子供向け書籍販売の推進キャンペーンや、アラビア語による読書キャンペーンなどの実施、また「レバノン人のアイデンティティとアラビア語」と題したシンポジウムなどの開催など、様々な文化的活動となって顕在化してきている。例えば2010年6月には、ベイルートの中心街であるハムラー地区で、「アラビア語こそ我われのアイデンティティ」「レバノン人のことばであるアラビア語を消滅させてはならない」といったスローガンを掲げた「アラビア語キャンペーン」が大々的に行われ、アラブ各地のメディアでも大きくクローズアップされた。

アラブ世界の出版・メディアの中心地と呼ばれるレバノンは、これまで報告者が論じてきたアラビア語を通じた繋がりとしての「アラビア語ネットワーク」においても重要な役割を果たしており、またアラビア語の現代化や変容を考えていく上でも重要な地域と言える。今回の調査では、アラブ諸国間における学術用語の地域偏差を解明するため、その資料となる医学・医療、情報科学に関連する雑誌、書籍、専門用語辞典を中心とした辞書類を70点ほど収集した。そして、現代的語彙(新語)と混成語(ナハト)に着目しながら、分野別に専門用語を抽出し、語彙形成・形態パターンの観点からの比較分析を目下進めており、現在6割方の作業段階にある。

3. 研究成果の発表

今回の調査で収集した辞書類・原典資料を中心に先端科学に関する語彙の解析を進め、その成果の一部を、『イスラーム世界研究』*Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies* 第4巻1,2合併号(2011年3月, pp.25-35, 京都大学イスラーム地域研究センター)に、現地語(アラビア語)による論考 *al-Naḥt fī al-Luġha al-‘Arabīya bayna al-Aṣāla wa al-Ḥadātha: Taqaddum al-‘Ulūm wa Waḍ‘ al-Muṣṭalahāt al-Ḥadītha fī al-‘Ālam al-‘Arabī al-Mu‘āṣir* (「アラビア語におけるナハト(混成語)の伝統と革新: 現代アラブ世界における諸科学の発展と学術用語の整備」)として発表した。

また、本研究による語彙データは、これまで小杉班と共同作業で進めてきた専門用語集『アラビア語語彙集: 生命・身体・医療』(日ーアラ・アラー日)としてまとめ、今年度中の完成・刊行を目指して

いる。



壁面に描かれた標語「テクノロジーこそ、現代のことば」（カイロのファイサル通りにある、ギザ市芸術高等学校にて）



ジャミーイー教授への聞き取り調査（エジプト・カイロ）。イスラーム知識人リファア・タフターウィーによる学術用語の創出と翻訳学校「アルスン」について、知見の提供を受けた。

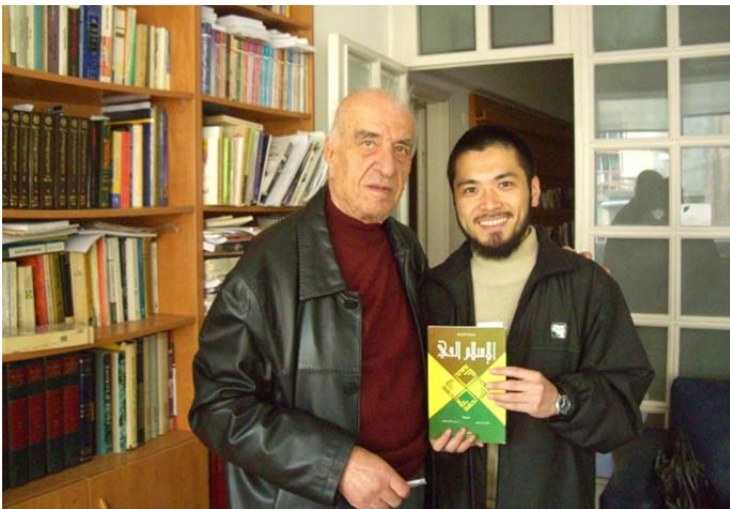


カイロ・アラビア語アカデミー（1932年設立）





ダマスカス・アラビア語アカデミー（1919年設立）



ムハンマド・カーミル・ダーヒル教授と（レバノン・ベイルート）。レバノン・シリアにおける先端科学および医学教育の実態について、報告者の質問に丁寧に答えてくれた。



電子辞書「ムジュタバー（選りすぐりのもの）」最新モデルの宣伝カー（シリア・ダマスカス）。



本屋のショーウィンドーに並べられた医学・医療に関する書籍（シリア・ダマスカス）。中央は『在宅医療・介護の実践マニュアル』。